入歯師と入眼師

新藤恵久

気候が温暖湿潤で、山地が七割を占める日本は、良質の材木が豊富なところから、日本人は古代から木と深いかかわりを持っていた。木の加工技術は、一万年以上前から高い水準にあり、世界に比類のない「木の文化」を創りあげていた。

六世紀の仏教文化の伝来は、日本古代彫刻に飛躍的進歩をもたらした。飛鳥から天平前半期までが、鋳造仏の最盛期で、やがて九世紀に入ると、日本彫刻史上最も優れた木彫仏の輩出した時代を迎える。この背景として、㈠縄文時代からの世界に比類の無い「木の文化」、そして、㈡この時代に独自の日本の文化が生まれたこと、さらに、㈢手先の器用さと、分業であっても全体との調和を把握出来るという、日本のすべての職人に共通する伝統的特性があったことが考えられる。

審美性や実用性、そして床の維持方法など今日の義歯に比して遜色の無い木床義歯は、印象に鋳造仏用の蜜蠟を用い、床の形成に木彫仏の内刳りの技法を使っているところから、平安中期（十～十一世紀）ごろ仏師の手慰みから生まれたと考えられる。また義眼の祖とされる玉眼が仏像に使われるようになるのは、平安後期である。義眼に関する専門書には、『眼科錦嚢』（一八三一年）があるが、江戸時代後期、伊勢松阪の入歯師柘植光石作の義眼が一九七九年発見された。

（東京都八王子市）